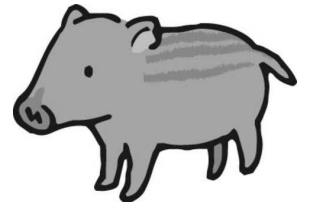


ネアンデルタール人は、誕生の地アフリカを出てヨーロッパに展開したそうです。ほぼ同時期に誕生したホモ・サピエンスがアフリカを出るのが遅れたのは、身体能力が若干劣っていたためらしいのですが、そのせいもあるのか家族単位で行動していたネアンデルタール人より大きな集団(複数家族)で行動していたようです。生物進化と同じように、道具の進化も偶然の発明・発見と、その積み重ねによるものですが、継承を積み重ねるためには、ネアンデルタール人の集団内個体数は少なすぎたようです。彼らの発明(工夫)は、世代を経るうちにその効用が忘れ去られて元の形態に戻ってしまい、出土する石器は似たような形状と大きさを持ったものばかりです。それに対して、ホモ・サピエンスの石器の大きさと形状は用途に応じてバリエーションに富んだものでした。これは、集団を構成するヒトが多かったために道具に対する発明(工夫・改良)が、集団の“誰か”が覚えていたために集団内に継承されて、それを踏まえた更なる発明が繰り返された結果と考えられています。

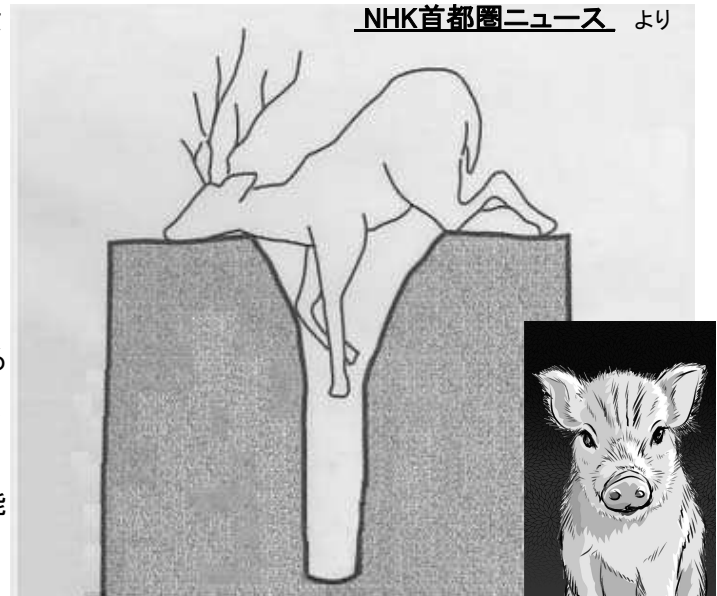
アフリカを出たホモ・サピエンスは、世界各地に展開し、およそ四万年前に日本列島に到達しました。彼らが通ってきた大陸や半島には、その地に留まったヒトたちもいたはずですが。古い時代の原始的で普遍性が高い文化の痕跡は、発祥の地に近いほど多いのではないかと思っておりましたが、日本列島には局部磨製石斧や集落跡など世界最古のものがあることに驚かされました。種子島にある陥し穴も3万年以上も前の世界最古のひとつだそうです。

まだ最終氷期の本州は、北が寒温帯針葉樹林、西が温帯針広混交林で食用に適する植物がありません。生息する動物は広範囲で移動しており、それを追う旧石器人も定着することはなかったようです。ただ、九州・四国から紀伊半島・三浦半島の太平洋に臨む暖温帯落葉樹林・常緑広葉樹林の狭い一帯には、食用植物があり一定期間の定着を可能にしていたようです。この地帯に含まれる鹿児島県種子島、静岡県三島市、神奈川県横須賀市、そして、新東名高速道路の愛鷹山麓で“陥し穴”が出土しているからです。罾猟である陥し穴は、仕掛けた後に獲物が落ちているか見回る必要から、一定期間その地域を離れることができませんが、獲物を必ず捕獲できる保証はないので、捕まえられなかったときの備えとして**食材を採集**していたと考えられます。今よりずっと寒かった当時でも、黒潮が流れる太平洋側南岸は比較的暖かく植物食糧に富んでいたのでしょう。



この南岸地域の一角、三浦半島の南西、神奈川県相模湾を見下ろす丘の上にある船久保遺跡でも陥し穴が出土しています。調査範囲だけでも13基、100mにわたって等間隔に並んでいて、四角い形にこだわりをもっていただようです。縄文時代には、丸い穴はイノシシ用、四角い穴はシカ用と推定されていて、足が長く背が高いシカを確実に捕らえるには、四角い穴が適しているらしいです。右の絵は四角い“陥し穴”の地中の断面ですが、深くなるに従って幅がすぼまっています。後ろ足の力が強いシカですが、この狭い部分にシカの細い前足が入り込んでしまうと動けなくなり脱出できなくなるようです。また、一列に並んでいるのも、警戒心の強い動物が障害物を乗り越えようとしにくい習性を生かした方法で、枝などを並べて小さな柵を設け、この柵の切れ目に穴を掘って獲物を誘い込んだと推定されています。

沖縄には、リュウキュウジカが生息していましたが、一万年前頃狩猟つくされて絶滅してしまい、それと交替するようにリュウキュウイノシシが登場しています。この両者の転換期に人類が登場することから、新たな狩猟獣として人為的にリュウキュウイノシシが移入されたと考えられているようです。琉球各島は東シナ海で隔てられているのでイノシシが泳いで渡ったとは思えず、ヒトが関わった可能性が高いわけですが、どのように運んだのでしょうか。外洋渡航は命がけで荷物は必要性の高いものに限られたと思うのですが、その



NHK首都圏ニュース より

中にどのような形でイノシシが加えられたのでしょうか。オスとメスのつがいの成獣でしょうか。それとも授乳期を過ぎた幼獣でしょうか。なんとか上陸できたとしても、野に放って繁殖が進むのでしょうか。生物学的には近親交配の繁栄は難しく、そんなことも経験したのでしょうか。自律的に増殖するまでには、何度も失敗しながら何世代もかかったのかもしれませんが。繰り返された命がけの挑戦は計画的なのでしょうか。それとも“狩猟獣がほしい”と言う、ヒトに与えられた環境が要請した偶然の積み重ねが、リュウキュウイノシシ界のイブを生み出したのでしょうか。

